

無量寿無量光への巡礼

底知れぬ寂しさ

花は美しく咲き、鳥はきれいな声でさえずつています。遠く霞める山、清く流れる谷川、こうした美しい世界に住みつつも彼はちつとも楽しまぬのであります。見てごらんなきい。花も散って行くではありませんか。何故かしら彼の胸底に高鳴る哀調の詩線は、それらの鳥の声も、桜の散る音も、谷川の流れの音も、ことごとくが悲しい葬列の行進曲か、万物の死の弔の鐘の響きの如く聞えるではありませんか。

彼はじつとして花を見ていることは出来ません。彼自身の一切も破滅されてゆくことを考えた時、彼は人生の寂しさに悲しまざるを得ないのであります。彼の今立っているその後には、幾多の墓がならんでいます。彼の妹の骨もこの冷たい石の下に埋れています。あの妹のこぼれるような笑みはどこに消えたのであろう。彼の友人も亦「釈賢仁信士」の五文字を地上の墓石の上に残して、そのたくましい肉体とあの快活な心とを地上から消してしまいました。彼は何かしら不安です。どうしてもじつとして居ることは出来ないであります。言い知れぬ不快、不安、底知れぬ寂しさ、彼はついに腰をあげました。

内なる声

彼は寂しいのです。苦しいのです。じつとしてはいられないのです。じつとしていようとしても、心の中から、「それでいてはならない。起つて歩め。」と厳しく命ずるのであります。彼は心の内のこの命令をおそれました。それはちつとも気持のよい声ではないからであります。その声を消そうとしてもみませんでした。けれども、このじつとしていてはならぬという声は、決して彼の力では消えないのです。彼が考えれば考えるだけこの声はつきりして来るのです。彼は幾度も腰を下そうとしましたけれど、それは決して出来ませんでした。彼はたった一人歩まねばならなかったのです。

青春殿

彼が歩んでいますと、人々がたくさん集って騒いでいます、立派な建物があります。そのご殿には「青春殿」という扁願がかかっています。これを見るとここには若さを歌っている人ばかりいるのです。高らかに若さを歌う人の声が聞えて来ます。老人は一人もいません。けれどもこうして若さを歌っているばかりで、一向に外には何を求めていません。

彼は吸い込まれるようにその中にはいつて行きました。彼ははじめて寂しさを忘れて、それらの若者と一緒に歌を歌い、踊りはじめました。人生の春、そこに何の悲しさがありません。何の悲しみ、何の暗さがありません。躍れ、歌え、俺たちは若いのだ。地位も名誉も美しい女も、それらの人生のあらゆるものは俺たちの前途に待っているではないか。俺たちは若い故に幸福なのだ。かれらは幸福に語り、歌っています。彼も今、それらの仲間入りをして踊りはじめたのです。

けれども、彼がふと青春殿の奥まったあたりを見つめていました時、彼は真青にふるいあがりました。ほの暗いかげには恐ろしい悪魔が手をさしのべているではありませんか。そうして彼らが若さを歌っている暇に、若者を一人ずつ引きこんでいきます。多くの若者たちは、それに目覚めてはいないのです。彼がそつと青春殿の裏口をのぞいた時、御殿の裏には痛ましい人たちの群が泣いていました。病人がいます。老人がいます。目の老いた者、耳の遠くなつた者、髪が白くなつた者、顔がしわだらけになつた者、腰のまがつた者、そうした様々の老人が集つて泣いているのであります。

彼はその老人たちの言うことを聞きますと、「おい、お若い人、早く出て行きなさい。私たちは若い時若いことに腰おろして、この青春殿で踊つて歌っていたのです。それがいつの間にか、悪魔の手によつてここに引きこまれました。あなたは早く出て行つて下さい。」と口々に申します。よく話を聞いて見ると、多くの若者たちは大概ちよいちよいこの「青春殿」の裏の「老人宮」をのぞいて見るそうですが「何になにまだ俺にそんな時が来るものか」と平気で歌っている暇に、この老人殿に引きこまれるのだそうです。

彼はふるい上つてこの青春殿を飛び出でようとした。彼の心の中には、またもとのような悲しい寂しさが湧いて来ました。そこでこの若い人たちの群から出て行くこうとしますと、多くの若者たちは彼を引きとめようとした。彼は聞きません。すると若者たちは嘲笑や悪罵をはじめました。「弱い奴だ。若さを歌わないで出て行くこうとする卑怯者だ」と彼をあざわらいますけれど、彼はついに出て歩みはじめました。「たった独りだ!」、彼は寂しい道を西に向かつて出てゆきました。

健康殿

するとその行く手に又一つの美しい殿堂があります。元気のいい声が聞えて来ます。寂しい彼はまたも吸いこまれるようにその中に入つて見ました。ここでは若者もいれば、壮年もいます。みな、鬼でもとりひしぐほどの強い者ばかりなのです。老人も少しはいます、が皆が自分の体の健康であることを誇つています。その五体は丸々と太つて皆自分の強そうな腕をふつては自慢しています。彼らは体を丈夫にするために毎日運動します。そして食物をたくさんとります。けれども彼らはただ健康で強いだけで、外には何も持つていませんし、得ようともしませぬ。彼らはただ強く健康であることより外には何の考えもないのです。誰に何を問うて見ても、あまり深いことは考えてもいないし、求めようとも致しませぬ。自分の目方を量つたり、力の強いことを競争したり、角力をとつたり、走り競争をしたりして、その記録をつくつて喜んでいきます。

彼は又嬉しかつたのです。その人たちの仲間に入つて、その人たちに混つて、一生懸命運動をしたり、飯を食つたりしていました。彼らは「健康なる精神は健康なる身体に宿る。」という看板をかけてこの内にいる者は決して不幸でないと思つています。

青春殿の裏のように老人はいないと彼に教えました。彼らは健康ではありません。従つて無邪気で単純で愉快ではありませんけれど、大概は、深いことを知らぬ馬鹿者ばかりでありました。彼らには何も深いことは知れてはいないのです。

けれどもここにも裏口がありましたので、彼はそつとのぞいて見ました。おどろくではありませんか。表と裏とは全く反対であります。この裏御殿には、病人ばかりいます。体のやせた骨ばかりのような人が苦しそうな声をしてうめいています。腹痛む者、足のたたぬ者、目の見えぬ者、脳の狂つた人、内臓の腐つた人、血をはいている人、全く何と言つていいかわからぬ不幸なる人が一ぱいあります。

彼はこれらの病人たちに聞いて見ますと、この「健康殿」の中にいる者は、一度は必ず、この裏御殿に来ねばならぬそうです。表で健康を自慢していても、何時、誰が、ここに引きこまれるか知らぬそうです。この病人殿の人は、再び表御殿に出ることもあるそうですが、病人殿の後には、更に死の国への入口があります。この死の国の入口に吸いこまれて行く者がたいへんたくさんあるそうです。そしてもし、この御殿で平気で暮す者は、一度は必ず、この裏の病人殿へ、そして更に、死の国へ行かねばならぬそうです。

元気のいい者も病人もこの死の国へ次から次へと吸い込まれるのですけれど、案外平気で見えています。自分の番にはまだ間があると思うからです。それよりも、表の健康者の集つている方はあまりに楽しいからです。ついその楽しさに心を奪われているのです。一度は裏の病人殿に入ることありますが、又表に出ると平気になつて来るのです。この御殿の人たちの頭は喉元すぐれば熱さ忘れるように出来ています。

彼はでもやはり健康でしたから、表の人たちと一緒に暮していました。彼は病気になることがないからであります。楽しい日が毎日続きます。どんな力も出て来ます。しかしある朝でした。彼が目覚まして見ますと、彼はしきりに胸のあたりが痛くて、体が火のように熱いのです。目を開いて見ると、そこは裏御殿でありました。彼には、「急性肺炎」という札がつけてありました。彼はがっかりしました。彼はひとえに表の健康殿に出る日の早かれかしと祈つています。

それから二月たつた時、彼は漸くにして又健全になりました。けれども、もう彼はじつとこの健康をあてにして暮すことは出来なくなつて来たのです。彼の心は以前のように寂しくなつて来ました。そうしてとうとうここをも出て行くことにしました。「やつぱり俺は一人だ」と、寂しい旅を西へ急いでいました。

美人殿

彼の目の前には「美人殿」がそびえています。御殿の前には美しい花が咲いています。彼はまたもその中に入らねばなりません。御殿の中は全てが美で飾られていますので、目がさめるようなありません。この中の人々は皆、美しいことが唯一の自慢であります。多くは女であります。中には男子もいます。毎日皆で美しくなることばかりにさせています。

長い髪を美しく結つている女もあれば、紅や白粉をつけている者もいます。お化粧はこの国での戦道具です。そうして彼らには美しい衣裳が不用なほどたんす箆筒に入れら

れてあつて、孔雀のように着飾ることが仕事であります。何でも、外から見たところさえ美しければ、胸が痛いことも体が苦しいことも辛棒します。食物などあまりいいものをとらなくても美しくなることばかり考えたらいいいのであります。衣服の模様にも、洋服の縞にも、日傘の色にも、髪の仕事にも、襟にも、ネクタイにも、全て流行というものがあつて、彼らはその流行を追うことが何よりも忙しいのであります。中には金がないために、この流行が追えなかつたり、衣服のいいのが造れないので、悲観して他人を嫉妬している者もあります。「ねたむ」ということは毎日この御殿で行われます。

彼はしばらく見とれていました。そうして彼も美しくなりたいと思ひました。汚い古い衣服はぬぎすてられ、彼の頭の髪は油で美しくわけられ、靴は輝いています。この御殿ではそんなにすれば「神士」だといいます。けれどもここも彼の長くいるべき場所ではなかつたのです。

彼がその裏口をそつと例の通りのぞいた時、おどろくではありませんか。一週間前まで美しく踊つていた美人の女が、美しい肉体に美しい化粧をこらして、天女のような綾羅星のように輝く宝石、それに身をつつんで踊つていた、その女らしい女が斃れています。見れば、その美しい衣裳の下には、肉体が破れて、目からも、口からも鼻からも、胸からも、まつ白い蛆が数知れず、うじゃうじゃとはい出ているではありませんか。更に、たくさんの人たちが、この裏でまたも、美しくなりたいとあせつている人たちの顔見ると、鬼のような顔になつたのもあれば、鉛白の下から、どす黒い皮膚が見えているのもあれば、幽霊のように瘦せたのもいる。

彼は又一種の悲哀を見出して、ここからも去らねばならなかつた。こうした何でもないことに囚れている人を見ているに堪えかねたからであります。

享楽殿

彼が第四番目にたどりついたのは、享楽殿であります。文字通り享楽^{たのし}むことであります。享楽以外には何の生命をも持つていない人たちが集つています。彼らが考えている幸福とは「たのしむ」ことであります。

彼が淋しさのあまりに、またも中にはいつて見れば、人々は何の苦もないように楽しみを求めています。金を儲けても、それは楽しむためであります。食物をとることも楽しむためであります。ある所を見れば酒を飲んで楽しんであります。大きな声で歌を歌いながら、泥のように酔つています。ここでは女は男の享楽のために使われます。見て下さい。肉を売る女もいれば、芸を売る女もある。そうした女たちが、享楽の歌を歌つて男を楽しませています。

彼もまたこの中に入つて享楽をはじめました。芝居があります。活動写真があります。花見があります。紅葉狩りがあります。彼らの人生唯一の目的は享楽にある。

けれども彼は決して何時までも幸福ではなかつた。過敏な神経を有する彼はそこでも享楽の裏を見ねばならなかつたのです。美しい夜の燈の下、酒の入れている徳利の蔭の暗い所には、恐しい悲哀の悪魔が笑つています。享楽の後の寂しき、物足りなさ、彼は長くそこにいつづけることは出来なかつたのです。更に何時ものように裏口

をのぞいた時、全く享樂の夢はさめてしまいました。破産して苦んでいる者もありました。罪におちて罰せられている者もあります。人生を呪っている者もあれば、荒み果てた心に変わっている者もあります。享樂殿の裏は呪いの牢獄であり、悲哀の国でありました。彼は全く享樂からさめて、またもここを出てゆきました。

物質殿

独り旅のさびしき、彼は疲れていました。過ぎにし過去を考えつつ行っていますと、またも一つの世界にたどりつきました。それは「物質殿」と大きな扁願のかかった、それはそれは物質にあかした立派な御殿であります。入口には「物質万能」の四字が光っています。

中に入つて見ますと、ここでは一生を金を儲けるために使う人ばかりがいます。朝から晩まで人々は金のことばかり考えています。この御殿にいる人たちの主義は「なるべく働かないで、なるべく多くの収入を得ること」であります。ですから、金が一銭でも多く得られる事なれば、ぞろぞろ集つて来ます。そうして如何なる方法を使つてもかまわぬのです。ですから貧乏人の汗脂をしぼりあげたり、悪策を使つたり、人を陥し入れたりする位は何でもないのです。

金がたくさんある人を尊敬することになっています。金さえあれば男爵にもなれるし政治さえ動かすことが出来ます。何でも金の力で買われてゆきます。金さえ見せたら魂までも買われてゆきます。学校に行くのも金で高く買われて行くためであり、何の問題も金ではじまつて金でおさまります。精神などのことについてちつとも5考えている人はありません。もしそれ以外のことについて考えていたりすると、役にたたぬ人間として笑われてしまいます。

しかしここは以前の御殿の人たちより真面目でした。多くは中年の人たちでありました。彼も今度は一心になつて金をためることに力を入れはじめました。ちよつとでもたくさんくれる人のところへ行つて働きました。

ある日でした。彼らの間には一騒動がおきました。それは、たくさん金をためた人たちと、ちつともたまらない人たちの間に大騒動、大争鬭がおきました。それは、働いている人たちがもつとたくさん金をよこせと言つて組をつくつたのです。そして使つている人たちを散々にいじめたのであります。愛とか人情とかはちつともなく、まるで修羅道であります。度々おこると見えて、人々は「労働争議」がおきたのだ、「小作問題」がおきたのだといひます。それから毎日のように人々は争いをはじめました。彼は、本気でこんなことに交わるのが嫌になつたので、その裏口を見にゆきました。

彼が裏口をのぞいた時、彼は全くあきれました。裁判所というものが出来ていません。そこでは親子が立つて財産のことで争いをしているのもありますし、一向働かないで他人のものを盗んだ人が責められているのもあれば、いい具合に金儲けを仕損じた人たちが、苦しみあつています。また金をあまりにもうけることにあせつて、全部取られてしまつて貧乏になつたというので泣いているものもあります。またあまり多く金を集めすぎたために、人から悪まれて殺された人の死骸もあります。

この国は、以前のどの国よりも、汚い醜い国でありました。若者である彼はいよいよこの御殿に在るべき人ではなかつたのです。彼は又出てゆかねばなりませんでした。黄金の中にも死の魔の手は容赦なく人をつれてゆきます。彼の胸底には、「お前は金を得ることのみが生きている目的ではないぞ、道を求めて出てゆけ」という鋭い声が致します。彼はやはり寂しい道をたどらねばなりませんでした。

地位殿

第六番目に彼が誘惑されたのは地位殿であります。ここでは地位というものがつくつてあつて、人たちは地位を得るためにあせつているところであります。財産が少々出来ると、大概はこの御殿の人にはいります。地位さえ高くなれば人に拜まれます。人間に地位が出来て、それに囚われて赤裸々な人と人との魂の温い世界はちつとも見られませぬ。国家のためとか村のためとかいいいますが、そんなことは表看板で実は地位につきたいのであります。代議士、県知事、大臣、村長、組長そんな地位を得るためには随分と汚いこともしますし、物質殿で貯えて来た金をおしげもなくまき散らして、地位にありつこうとします。この御殿では地位を金で買うことさえ出来る道が開けています。地位国の人たちは、先輩の御ひいきによることを希つていますし、地位にさえありつけば他のことはどうでもいいのであります。この人たちの群では、人を拜まぬかわりに地位をおがみます。ですからすぐ人の地位を問うて、人の価値を定めます。この御殿の人たちの出世とは地位を高めることであります。

彼はここにも長くはいられなかつたのです。裏口までのぞきこまなくても、何人も6何人も地位を失つては、裏口にすいこまれて行きます。何時ものように裏口は死か呪いかにきまつています。彼の魂の裏には、やはり出て行けという厳しい声が聞えて来ます。彼はまたも出て寂しい旅路に出ました。昔、親鸞という男が、聖光院の門跡を捨てたように、魂の真の声に動かされるままに。

名誉殿

名誉殿は地位殿の親類であります。「人は一代、名は末代」というのが此国の人たちの標語であります。何時も名誉になることばかり考えています。親は小さい時から「そんなことをすれば他人に笑われる」と子供に教えます。他人に笑われることがここにいる人たちの一番おそれていることであります。ですから、たとえ慈善事業に金を出しても、派手くしく名を掲げないことには承知ませぬ。善人だと言われ、賢い人だと言われるために動いているので、衷心の願いのために動く人はいないのです。そのくせ、ここでは他人をけなすことばかり考えています。人が一寸でも名誉を得そうになると、すぐ集つて陥れてしまいました。

彼が見ます。彼らは愚か者なのです。名誉は得ようとした者が得るのではないことを知らぬのです。名誉を得ようとして得た名誉は、それはほんとの名誉ではないのです。ペテン師が世の中をひつかけただけのことです。彼はこの国が偽善者、虚偽の人の集りであることを知りませんでしたので、名誉まで得ようとするほどに魂の死んでいない彼は又出てゆきました。

恋愛殿

長い長い彼の魂の巡礼の旅に、またも与えられたものは恋愛殿であります。その入口にはブローニングという男の言ったという「Love is best」という金文字が光っています。この言葉の意味わ、「恋は最上なり。」ということでもあります。彼はこの文字にひきつけられ、こここそ彼の魂をすえるべき永遠の殿堂ではないかと勇しくかけこみました。

人生の春を歌う若い人たちが、恋の歌を歌いつつ華かに踊っています。人々は皆な言っています。「地上に生きているのは物質を得たためでもない。地位名誉、そんなものが何になるか。恋は最上である。恋愛は神聖である。恋愛の殿堂の裏にのみ人生の全ての鍵は納められているのだ。」全てに飽いで寂しい胸を抱いていた彼は、全く共鳴してしまいました。見よ、数多の処女たちは、彼に美しい青い壺を捧げようとしているではないか。彼は数多の取りまく女たちの中から選ばれた一人を彼のものにししました。美しい恋の殿堂、赤い唇、白い膚、彼はついに幸福でありました。如何なる詩人も彼らの幸福を歌うことは出来ないでしょう。彼の魂は過去に感じたことのない神聖さ、厳肅さを感じました。彼は酔うたのです。如何なる醜さも見えないほど彼は酔うていたのです。

けれども彼は、恋の歓楽からさめかけた時、見てはならぬ悪魔の姿を見ました。聞いているならぬ悪魔の声を聞きました。彼は恋の名のもとに相手の女の運命を傷つけていました。彼は女を愛すのだと思う間に女を弄んでいたのです。女は血みどろになつていました。女のみならず、彼までが話に聞いていた剣の山の地獄、刀葉林地獄におちているのであります。彼は恋は全く苦悩であることを知ったのです。見てごらんなさい。彼の周囲には、金につまつて男と女とが心中したものも幾組あつたか知れませぬ。相手の女の心が変わったというので血刀を提げて、女や女をとりまくたくさんな人を斬つた者もいます。棄てられて、呪いの裏口に入った女もいれば、失恋のために死んでしまった男もあります。真剣であればあるほど、傷ましい恋の敗惨者の死骸がうようよと裏御殿に呪いの息をふいています。

彼が真実に女を愛しようとすれば、彼はついにこの殿堂から去らねばなりません。けれども彼がこの恋愛殿を去るには、とても堪え忍ぶことの出来ぬ涙が流れます。中には、男と女とが結締してこの恋の苦悩から救われる者もありましたが、それは彼らを決して幸福にはしないのです。彼らの間には、魂と魂とが抱きあおうとすればするだけ、悪魔がそれをさまたげます。夫婦は常にこの悪魔に一生おびやかされます。嫉妬の悪魔がそれであります。

男女の恋愛も、夫婦の愛も、それはついに彼の寂しさを充たすには足りなかつたのです。否、この殿堂の裏で彼はぬぐうことの出来ぬ傷を受け、かつて味つたことのない寂しさを知りました。彼はまたもここを出なければなりませんでした。

哲学殿

彼はいよいよ考えねばなりませんでした。彼の一人旅はいよいよ淋しいものになりました。求めて求めて行く時、そこにはまたも御殿が立っています。哲学殿と書いてあります。至つて質素で見たと静かであります。彼はまたも入りました。

この中には学者が集っています。学校もあります。みな一生懸命に書物を読んだり、書いたり、考えたりしています。彼はいよいよ、こここそ、と思つて学者や先生たちの言うことを聞きました。毎日、食うものも食わず、寝るのもおしんで書物を読みます。この傷む胸、寂しい心を充すものはないか、この不可解なる人生の旅について根本的な解決を与えてくれはせぬかと、いよいよ真剣になりました。一年たちました。二年三年、数年たちました。彼の一生でこの位、力をそそいだ所はないでしょう。彼の頭の中に色々なことを知りました。過去の偉人聖者たちの言つたことをたくさん知りました。けれども、学者たちを見てるとたまらなく寂しくなりました。誰か一人賢いことを言うことと皆の考えはその通りになつて来るのです。学者と言われる内には、人の言つたことを解釈している人もあります。鉄と糊とで、世男の今まで出た人たちの説をきり集めて本にすることを仕事にしている人もあります。よくよくそれらの人の言うことを聞けば、何が何やらわからなくなるのです。若者の中には「人生ついに如何」と叫んで疑いそのまま死んで行く人もあります。ここにとどまる人々をよく見ると、要するに、たくさん概念を頭の中におさめこんでいるのにすぎないので。ですからついに彼を救うことは出来ないのです。何でも問題は解決されるものではないのです。彼はついに何が何やらわからなくなりました。徒らに学問を頭8につめこんで空論を弄ぶことを知つただけであります。学校もありますが、それは要するによく考えたり、記憶したりする者に点教をたくさんやる所であつて、彼を自由にのばしてくれる所ではなかつたのです。何の味もない死そのもののような世界にはとても寂しくていたたまれないので彼はここをもまた出でなければならぬのでした。

化身土

彼は衰えてました。身体も心も弱りきつてしまいましたが、しかし胸のどん底からは「とどまつてはならぬ。歩めよ」とちつともとどまることをゆるしませぬ。いよいよ寂しさは増して来ます。彼にはついに何物も与えられないのでしょうか。やがて崇高なる、厳粛な門が見えて来ます。近よつて見れば、宗教殿と書いてあります。

「人生の旅に疲れたる者よ、来れ。人生最後の解決を得んと思ふ者よ来れ！」と書いてあります。彼の足はおどるように入つて行きました。彼はここで最後の解決を得ようとしたのであります。御殿の中を見れば、彼のように人生の旅に疲れた人たちが来ています。過去に見て来た、各々の御殿の裏で見たあの敗惨の人たちも多くここに見受けました。見れば、ここには色々な祭壇が設けてあります。その祭壇の前には、熱心なる信者たちが集つて色々な行をしています。ある者は難行苦行しているのもあります。あるいは口に一生懸命お称えをしているのもあります。善根功德をつんでいるのもあります。祈祷している人もあります。過去の罪を懺悔している人も

あります。神や仏の慈悲に法悦の涙を流しているものもあります。説教者たちはさかんに説教しています。その説教に酔うた人たちは、その感激の涙を信仰の証にしてよろこんでいます。彼もついにその仲間に入って痛む心の傷をいやそうとします。彼はわけもなく感激の子となりました。彼は罪の懺悔もしました。救われたとも思いました。

彼の周囲を見渡せば「罪悪は一つもなくなつた」と言っている人もあります。「罪を清められた」と、清らかな顔をしている者もあります。一生懸命お題目をとなえている人もあります。老人仲間には「死にさえすれば極楽に行かれる」と言つて歓喜の椅子に腰かけている者もあります。「ここが浄土だ」と叫んでいる者もあれば、「俺が如来だ」と威張っている者もあれば、「地獄行きがおそろしいが、お浄土参りがわからぬ」と言つて泣いている者もある。

ここは光明の天地だと言われるのに、不思議なことには、宗門と宗門の間に喧嘩があつたり、一宗一派の間で「正しい」とか「まちがいだ」と言つて争つたり、時には血まで流して戦つたり、自分は何もない人間が高い所で説教したり、色々な悪魔がなかなか騒いでいますが、彼には見えなかつたのです。

けれどもついにまたも彼にとつては痛ましい日が来ました。彼は感情の沸騰から覚めました。そうして、彼は再び彼の内に淋しい魂の声を聞きました。彼はもう恩籠の裏に眠つていることも、祈祷にやつれていることも出来なくなりました。彼の足はまたも化身土から出ていました。

無量寿無量光に生きて行く

彼はそれから長い旅を続けましたが、もう再び色々なご殿を見ることは出来ませんでした。彼は依然として淋しいのです。見れば前途にはおそろしい山もあります。河もあります。けれども道はだんだんと開けています。彼はなお不安のままに、与えられた道を進んでいますと、彼を上げます声が聞こえて来ます。

「汝ただ決定してこの道をたづねて行け。必ず死の難なけん。もしとどまらばすなわち死せん。」

彼はこの声に力づけられました。彼は目をあげて前途を見つめました。

その時です。おどろくではありませんか。その行く手には無数の先覚者たちが進んでいられます。釈尊もいられます。ソクラテスもいます。親鸞聖人もいられます。善導大師もいれば、無数の光に輝く先覚者たちが進んでいます。彼はその方々のみ声にふれました。彼の足は軽く、しかもどつしり大地をふみしめて力強く歩みます。永遠の彼方は光明に輝いています。後をふりかえれば暗黒であります。過去の十箇所の殿堂は暗黒にとざされて見えなくなっています。彼はついに永遠の死なき天地に生れて来たのであります。彼の一步一步の歩みには、そこに蓮の台が生れます。彼は安心して、しかも道を求めて歩むのです。悪魔もいなければ碍げもない絶対無碍の大道を歩んでいます。

彼の口からは、南無阿弥陀仏と叫ばれています。それが彼の一步一步の歩みの生命躍進のリズムであるように聞えます。先覚者たちとは三千年もへだつていたり、七百

年、百年とへだつていますけれども、不思議にも、それらの導きの声が手近に聞えてきます。彼はここに永遠に不死の大道に生れたことを感謝しています。後をふりかえる時、後からもまた順々と来る人たちが見えます。彼は合掌しながら南無阿弥陀仏を称えて進みます。